広報誌

ある群像

2023年6月号

公益社団法人 好善社
東京都目黒区中町1−7−4
〒153−0065
電話：03−3712−3845
Fax：03−3791−1150
2023年5月25日
発行 三吉信彦
編集 長尾文雄
川﨑正明

多磨全生園秋津教会の礼拝を終えて帰路につく皆さん。(2021/12/12)　撮影・川﨑正明

療養所の道を歩く

好善社は、全国のハンセン病療養所で60回のワークキャンプを行ってきました。その作業の一つに「道づくり」がありました。車椅子が通れる道、教会につながる道、盲導鈴に向かう道など、キャンパーと入所者がスコップやツルハシを振るって汗を流しました。

あれから時が流れ、それらの道を歩く人が激減しました。終焉の足音がするばかりです。ある教会は出席者が数人となって、礼拝を中止しています。そのことは、今日のハンセン病療養所の状況を象徴しています。2023年5月1日現在の全国の入所者数は810人、平均年齢が87・9歳です。高齢化がすすみ、もう園内の道を歩く人の姿がほとんど見られません。

そんな中、多磨全生園の秋津教会では、6人の教会員で、毎週礼拝を守っています。療養所の道には、天上の人となった方々も含めて、無数の足跡が残されています。それは尊いいのちを生きた人たちの証です。残された皆さんの平安の日々を祈ってやみません。

理事・川﨑正明

3年ぶりに栗生楽泉園を訪ねて

好善社理事　藤原真実

コロナ禍で訪問ができない間に、栗生楽泉園の大切なお友だちが重病になり、亡くなりました。お見舞いにもお葬式にも伺えず、絆が次々に消えてゆくような空虚感の中、時が過ぎ、草津はますます遠くに感じられていました。そんなとき、聖慰主教会の聖餐式（礼拝）が再開したことを知り、4月2日（日）、3年5ヵ月ぶりに栗生楽泉園を訪問しました。

聖慰主教会の聖餐式

午前8時半頃に草津に到着、聖慰主教会まで行くと、山本愛子さんを乗せた松浦司祭の車が到着したところでした。玄関を入って左側にある小部屋が、今では小さな礼拝所になっています。右手に松浦司祭、左手に山本さんと草津聖バルナバ教会会員の方の席がありました。聖餐式は聖歌の省略を除けば以前と変わらず、陪餐も司祭がホスチア（パン）をぶどう酒に浸して各自の口に入れるという方式でした。その日の教会員出席者は山本さんだけで、そのおひとりに松浦司祭と聖バルナバ教会の方が寄り添う光景はじつにあたたかで、胸に迫るものでした。最後のひとりまで、という思いはこのように実践されるのだと感じ入りました。

病棟の教会員を訪問

骨折して入室中の教会員Eさんをお見舞いするため、山本さんとご一緒に病棟へ向かいました。まず福祉室へ行き、そこで面会の可否を病棟に聞いてもらいます。許可が出たらノートに氏名等を記入し、面会カードを首から下げて面会室に向かいます。

私たちが行くと、すでにEさんが待っていてくださり、介護人さんがあたたかい缶コーヒーを運んでくださいました。変わらずとてもお元気そうなお姿に再会でき、嬉しくてたまりませんでした。骨折はもう治っていますが、一般舎のご自宅にはなかなか帰れず、介護付きの「センター」への入室を勧められているそうです。介護付きでない一般舎は、今では空き部屋だらけだと聞きました。

聖慰主教会の聖餐式の様子

過疎化する療養所の中で

病棟からの帰り道、山本さんに促され、リハビリ科の前で足を止めました。入口の両側にたくさんの作品が張り出されています。よく見るとどの作品にも氏名が付され、制作者は山本さん、Eさんを含む3名だけでした。リハビリ科に通う人も少なくなったのです。センターにも5名しかいないとのことでした。お昼をごちそうになった山本さん宅の一角には、兄上の藤田三四郎さんとそのご夫人、そして最近亡くなられた方の遺影が飾られていました。長い間おおぜいの方々のお世話をし、見送ってこられた山本さんは、今も2名のご友人の担当をされています。「あちこち痛いところもあるけど、そんなこと言ってられない」。そうおっしゃる笑顔の向こうに、とても強くて大きなものを感じました。

聖バルナバ教会を訪問

松浦司祭夫人からお声がけいただき、聖バルナバ教会にもお邪魔して歓談の時に恵まれました。ご夫人からは、聖慰主教会代表の石浦教良さんが亡くなる直前のこと、藤田三四郎さんら教会員の方々を、教会の納骨堂に納骨したことなど伺いました。納骨式に外部の方々を呼ぶことはできなかったとのことです。実際にそばで支える方々の働きの尊さを思い知るとともに、離れている私たちは何をするべきなのかを、あらためて考えさせられる訪問でした。

ハンセン病療養所に生きる人びとの「いのちの証」⑳

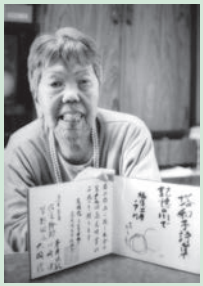
川﨑正明・記

胸の泉に

塔　和子

かかわらなければ
　この愛しさを知るすべはなかった
　この親しさは湧かなかった
　この大らかな依存の安らいは得られなかった
　この甘い思いや
　さびしい思いも知らなかった
人はかかわることからさまざまな思いを知る
　子は親とかかわり
　親は子とかかわることによって
　恋も友情も
　かかわることから始まって
かかわったが故に起こる
幸や不幸を
積み重ねて大きくなり
くり返すことで磨かれ
そして人は
人の間で思いを削り思いをふくらませ
生を綴る
ああ
何億の人がいようとも
かかわらなければ路傍の人
　私の胸の泉に
枯れ葉いちまいも
落としてはくれない

（詩集『未知なる知者よ』より）



高見順賞受賞の塔和子さん（1999年）

俳優・吉永小百合さんが塔和子さんを訪問（2009年4月30日）

塔　和子（とう・かずこ）

1929年（昭和4）、愛媛県に生まれる。1943年、ハンセン病により、国立療養所大島青松園（香川県木田郡庵治町）に入所。1951年、同園の赤澤正美と結婚。病気完治後も同園で詩作に励み、第一詩集『はだか木』から19冊の詩集を発行。1999年『記憶の川で』で第29回高見順賞受賞。2003年、塔和子ドキュメンタリー映画「風の舞ー闇を拓く光の詩」完成（監督・宮崎信恵、詩の朗読・吉永小百合）。2006年『塔和子全詩集』（全3巻）出版。2007年、故郷の愛媛県西予市明浜町に「塔和子文学碑」、翌年「塔和子第二文学碑」建立。同年、国立ハンセン病資料館に「塔和子資料」が常設展示される。2011年5月、国立ハンセン病資料館で、塔和子の会が同資料館と共催で「塔和子展」を開催。2013年8月28日、急性呼吸不全で死去。83歳。8月30日、大島青松園で告別式。11月3日、園内の大島会館に於いて塔和子の会主催で「塔和子さんを偲ぶ会」を開催した。2014年3月17日、故郷の西予市明浜町田之浜の両親の墓石に、本名「井土ヤツ子」の名前を刻んで分骨された。塔和子の人間復権の日となった。

19冊の詩集に1000編の詩を紡いだ塔和子の詩は、自己の存在を根源的に見つめながら、一貫して人間の尊厳を問う「いのちと魂の言葉」だった。高見順賞の評者たちは、異口同音に「生の奥」「生の深部」「自分の本質」からいのちを見つめ、表現していると評した。今では上記の「胸の泉に」が、代表的な詩として読者の心をとらえている。筆者もこの最後の6行の言葉に出会って衝撃を受け、塔さんを訪ねて交流を続け、2016年に『かかわらなければ路傍の人～塔和子の詩の世界』を上梓した。今年は塔さんの没10年になるが、その詩は生きたいのちの証としてハンセン病文学に刻まれ、後世に読み継がれている。

ラオスのハンセン病回復者村を訪問

好善社の新しい訪問地とのかかわりを求めて

好善社監事　加藤裕司

1月22～24日、三吉信彦代表理事、阿部春代理事、渡辺圭一郎理事、加藤裕司監事の4名が、タイ国チャンタミット社と好善社の合同理事会に参加後、ラオスを訪問しました。目的は、北部2つのハンセン病回復者村を訪問し、次のことについて話し合うためでした。①シヴィライ村の高校の設備の拡充について。②近隣村の小学校の村道からの坂道を舗装するワークキャンプ実施の可能性。今回の視察は、ラオスの国立皮膚科センター（NDC）の協力を得て実現しました（三吉代表理事の報告より）。その様子を加藤監事より報告して頂きます。（編集部）

ラオス・ソムサヌック村のヘルスセンター玄関前で。ヘルスセンターの皆さんと好善社3人（後列左から2人目が加藤裕司監事）　撮影／阿部春代

◆ラオスの土を初めて踏む

自分にとって初めてのラオス訪問。東南アジアの中でも、比較的日本とは馴染みが薄い国柄なので、簡単にラオスの概略を記してみたい（表参照）。

当初、社会主義国家とは、旧ソビエトのような建物は灰色一色で、暗いイメージを持っていたが、実際に首都ビエンチャンに到着すると、経済開放政策の影響か、街中には様々な広告看板が無秩序に溢れかえっていた。雑多な喧騒とバスの排気ガスの臭い。異国の地に着いたことを身にしみて感じた。

バスセンターでは、NDCのアマラー所長と以前チャンタミット社のワークキャンプに参加経験があるトンダー医師が迎えてくださる。国の公的機関であるNDCが、日本の小さな公益社団法人の訪問にわざわざ所長自ら足を運んでくれることに、好善社との今までの関係が、いかに良好で前向きであったかを表しているように思えた。

正式名称／ラオス人民民主共和国（1975年12月成立）
面積／約24万平方キロメートル
人口／約730万人（ラオ族を含む50民族）
首都／ビエンチャン
政治／人民革命党による1党指導体制での社会主義国家
通貨／キープ（1ドル約1万7200キープ）
経済／1986年から市場経済化と経済開放を柱とする「新経済メカニズム」に着手。1人当たりGDP約2千600ドル（日本約3万9千ドル〈2021年〉）
（外務省ホームページより）

◆山岳地帯のハンセン病回復者村

NDCの車で最初の訪問先であるハンセン病回復者村のひとつであるソムサヌック村（地図の赤印）に向かう。以前は高速道路がなく片道4～5時間かかったそうだが、中国の援助で立派

な高速道路が完成して、約1時間で村に一番近いインター出口に着く。ただし、高速を降りた途端、道路は舗装もないデコボコ道で、車に激しく揺さぶられながらソムサヌック村に到着。

ラオスは国土の70％以上が山岳地帯で、ここも奥深い山の一部に集落がある。正面入り口から診療棟のある建物までの坂道は村の人々の手でコンクリート舗装がされていた。約370棟の木造平屋建の住居が、所狭しと傾斜地に立ち並び、約1500人が生活をしているとのこと。

小学校を訪ねるため、傾斜の強い坂を登っていくと、山岳地帯が嘘のように平らで広い校庭が現れた。おそらく山の頂上を平らに切り落として平地にしたのだろう。その校庭の片隅に平屋の校舎があり、校長先生はじめ学校関係者が迎えてくれた。三吉代表理事から好善社の支援の意向を話す。前回代表理事が訪問した時も同じ説明をしているが、コロナによる3年の月日の隔たりがあっても、校長先生もしっかりと覚えておられ話し合いは前向きに進んだ。時折納得したように少しだけ笑顔になる校長の顔を見ると、第一印象で怖そうに思っていたことを申し訳なく思う。

ラオス・ビエンチャンの市内風景（撮影／阿部春代）

（写真右＝ソムサヌック村の小学校の下校風景　撮影／渡辺圭一郎）

◆現地の方の声に耳を傾ける

引き続き同じくハンセン病回復者村であるシヴィライ村の高校に向かう。ソムサヌック村から15分程度。ここも山を造成して中学校、高校の平屋の校舎が広い平らな校庭をはさんで建っている。建物はブロック積のしっかりしたものだが、内部は天井が張ってある部屋となない部屋があり、中途半端な印象。離れにあるトイレの建物も外観はしっかりしているが、給水管は建物の裏側まできているのに、内部に接続されておらず、こちらも中途半端。学校関係者が、今必要な物や不足している物の現状を説明してくれる。現地に出向いて直接現地の方の声を聞き、現地を見て、はじめて好善社がどうかかわっていけるかをイメージ出来たように感じた。

高校を出る頃には日も暮れて、道路に街灯はあるにはあるが、とにかく周囲は暗い。ビエンチャンの派手で無秩序なネオンの明かりは、ここまでは届いていない。市場経済が進んでいると言われるが、それはあくまで都市部のことであって、ここは過疎の村の姿そのものであった。

◆訪問の積み重ねの歴史の上に

慰廃園閉園後の好善社の活動の歴史は、訪問の積み重ねの歴史であると自分は思っている。国内の療養所への訪問に始まり、台湾、タイ国、そしてラオスと直接足を運ばなければ、今の好善社の事業は成り立っていなかったであろう。振り返ればある程度の事業としての成果となったことも、地道な訪問の繰り返しがあったからに違いない。訪問によって関係が深まり、信頼関係が築かれるからこそ、次の行き先が見えるのでないだろうか。

今回、直接ラオスの地を踏み、NDCの方、ソムサヌック村、シヴィライ村の方々と時間を共に出来たことは、貴重な体験であり感謝である。ただ、一回限りの訪問では、好善社のかかわり方ではない。何度もその地を訪問することが、好善社の働きの基本であるのだから。多分近い将来またこの地を訪れる自分がいるであろうと、期待を込めて勝手に想像している。

キャンパーたちのその後⑪

知ったら離れられなくなって

稲村　茂

1983年春、当時通っていた教会の方から紹介されて初めて好善社の名前を聞き、その年の夏に群馬県草津にある栗生楽泉園のワークキャンプに参加しました。それまでハンセン病のことは聞いたことはありましたが、特に深い関心があるわけではなく、実際のところほとんど知らない状態でした。

キャンプに参加が決まって、好善社の事務所で当時の藤原偉作理事長から概要を伺い、初めて療養所の門をくぐりました。園の方からお話を聞き、道路整備を一緒に行いました。ある時、足に釘が刺さって気づかない入所者の話を聞き、ハンセン病が神経を麻痺させる病気であることを知りました。

■自分ができる範囲の活動を

キャンプに参加したのはこの1回だけですが、この病気が社会で誤解されたままになっている状態を改善するために、自分ができる範囲の活動をしようと思いました。好善社の献金、職場の同僚への紹介、勤務していた高校などで、多くの人々に知ってもらうことに力を入れてきました。その高校では、生徒たちにハンセン病のことを正しく理解してもらうために多磨全生園の神美知宏（こう・みちひろ）さんを招いて、2度講演会を開催しました。また、結婚してからは妻（車椅子利用者）と娘の家族3人で、栗生楽泉園を2度訪問し、入所者の藤田三四郎さんとお話をする機会をいただきました。娘は、その体験を学年文集にまとめ、後にタイでのワークキャンプにも参加しています。娘が進学した女子学院は、好善社との関係が深く、毎年学校で行うバザーにも家族で参加しました。

■キャンプ経験を生かした人生

キャンプに参加してから、今年でちょうど40年が経ちました。その時の印象が今でも強く、その後の人生にも影響を与えています。社会の中で低く見られている人々と一緒に学びたく、高校で教えた後、障がい児の学校にも勤務しました。同じワークキャンプを体験した方々との交流の機会が持てないことが残念ですが、彼らもそれぞれの場所でキャンプの経験を生かしていると思っています。

私は現在、千葉県の公立と私立の高校（県で唯一のキリスト教学校）で、英語の授業を担当し、障がい者の団体にも参加しています。妻はがんで2年前に亡くなりましたが、娘は東京大学の大学院で、宗教学を学んでいます。

阿部春代著（好善社理事）

『手足を洗い続けて』（仮題）

出版間近　編集工房ノア刊

好善社から派遣看護師として、タイ国シリントン病院を拠点に、ハンセン病患者・回復者のケアに携わった著者の活動とこころの軌跡。

ハンセン病回復者との出会いをきっかけに、好善社が主催したハンセン病療養所でのワークキャンプに参加。その後、導かれるように看護師として、宮古島や岡山の療養所で活動。そして、タイ国に遣わされてハンセン病回復者の手足の後遺症をケアし続けて30年余。その活動で出会ってきた人たちから与えられた恵みを振り返る。

本文は、第一章「出会い」第二章「私の歩み、タイ国への道のり」第三章「ボランティア看護師と呼ばれて」第四章「村の高齢者を訪ねて」第五章「チャンタミット社の若いワーカーたちとの協働」第六章「備えられた出会い」と続きます。

特に若い看護師の皆さんに読んでほしいと願っています。詳細は好善社のHPをご覧ください。

（好善社社員・長尾文雄）

好善社短信

◆3年ぶりに社員総会を対面で開催

5月3日(水・祝)午後、東京都目黒区祐天寺の「祐天寺カフェ」にて開催した。社員25名中18名が対面で、5名がオンラインで参加し、2022年度の事業報告を受領し、決算を承認した。終了後、社員懇談会を開き、近況や新年度への期待等を語り合った。

◆「ハンセン病を正しく理解する講演会2023」開催予定

共通テーマ「人間の尊厳を問う」

関東地区　6月24日(土)午後2時
於／日本キリスト教団新栄教会
講師／川﨑正明さん　(好善社理事)
「生きた証としてのハンセン病文学」

関西地区　7月1日(土)午後2時
於／日本キリスト教会西宮中央教会
講師／黒尾和久さん
(国立重監房資料館部長)
「ハンセン病差別と隔離」

◆タイ国青少年ワークキャンプ開催

日時／8月10日〈木〉～17日〈木〉
場所／ノンソムブーン(コンケン県)
参加キャンパー募集中

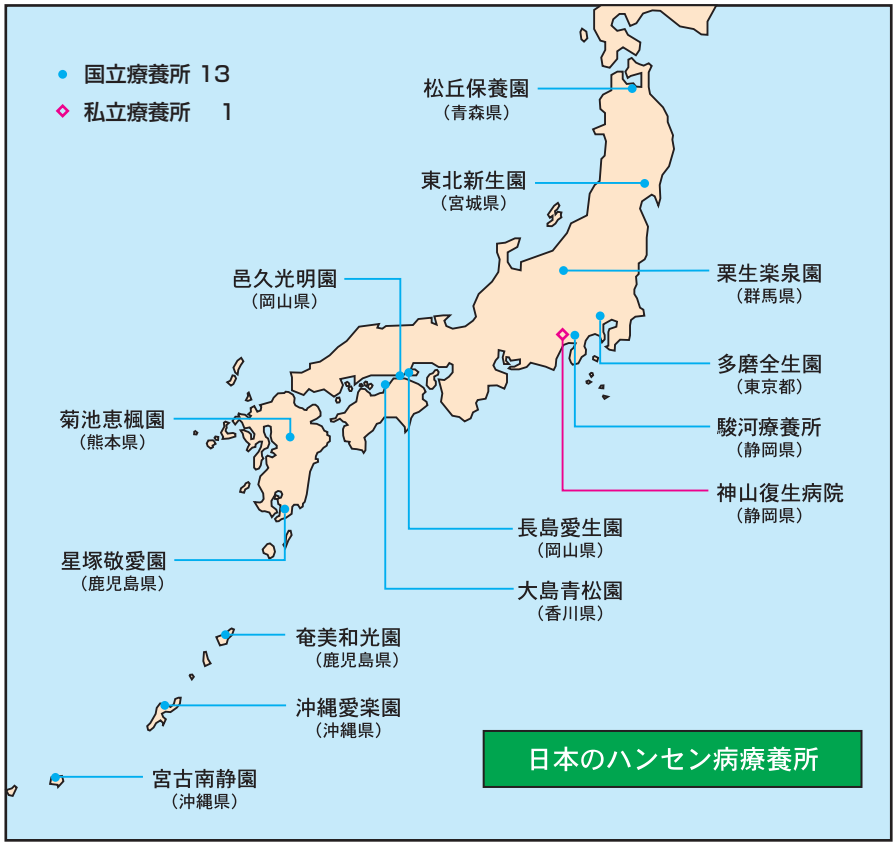
◆3年ぶりのタイ・ラオス訪問

1月19～20日、三吉信彦代表理事をはじめ3名の理事監事が、タイ国チャンタミット社の年次総会に出席。その後、ラオスの二つのコロニーを訪問し、教育施設の支援策を決定した。

国立療養所　入所者数
2023年5月1日現在

	男	女	計
松丘保養園	18	29	47
東北新生園	9	23	32
栗生楽泉園	23	19	42
多磨全生園	43	60	103
駿河療養所	18	20	38
長島愛生園	50	46	96
邑久光明園	28	33	61
大島青松園	21	16	37
菊池恵楓園	52	85	137
星塚敬愛園	28	41	69
奄美和光園	4	11	15
沖縄愛楽園	46	50	96
宮古南静園	17	20	37
23年5月計	357	453	810
22年5月計	416	511	927
前回比	-59	-58	-117

2023/5/1全療協提供　現在の平均年齢　87.9歳



6月・夏期募金のお願い

国内とタイとラオスのハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2023年度募金（会費・寄付）目標額　1,000万円

ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2023年5月1日現在の入所者数810人、平均年齢87.9歳となりました。急速に進行する終焉期を迎えています。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止、「国家賠償請求訴訟」原告勝訴、「ハンセン病問題基本法」成立、そして2019年「ハンセン病家族訴訟」原告勝訴による「ハンセン病家族補償法」が成立しましたが、なお、社会に残る偏見・差別の十分な解消には至っていません。好善社は次のような活動を行っています。

国内ハンセン病啓発・支援事業

◆全国13ヵ所の療養所訪問・交流活動を続ける。
◆偏見差別解消のための講演会・出版・啓発活動 。
◆回復者・入所者のいのちの尊厳が保障され、その人たちの名誉回復、ハンセン病問題の最終的な解決の実現を願っての支援と啓発活動を続ける。

2023年度収支予算（抜粋・単位円）

支出		
事業1	療養所訪問交流費	650,000
事業2	広報啓発活動費	5,030,000
事業3	海外国支援事業	
	・チャンタミット社支援	1,500,000
	・ラオス支援（友愛基金より）	2,500,000
	・専門家派遣（看護師）	2,200,000
	・現地調査・交流費	2,500,000
事業管理費		6,790,000
収入	会　費	3,400,000
	寄　付	6,500,000
	雑収入	8,000

タイとラオスのハンセン病支援事業

今年度870万円の活動費が必要です

タイ国の姉妹団体チャンタミット社を支援しています

好善社の姉妹団体チャンタミット社は、第33回全国修養会を4月25日～27日に4年ぶりに開催しました。タイ東北部で全国9地区から68名が参加し、再会を喜び合いました。ハンセン病回復者が、初めて他県へ出る機会になった活動でしたが、30年を経て回復者は高齢になって参加者は減少、同行の家族が半数以上でした。私は、高齢者が座ってできる下肢の運動を紹介しました（写真）。　阿部春代

好善社は1982年からタイ国のハンセン病にかかわり、阿部春代社員（看護師）を東北部の病院へ派遣し、その29年間の働きを終えました。しかし、好善社のタイ国での事業支援はなお継続しています。特に、1987年以来好善社は、タイ国のハンセン病支援団体チャンタミット社の運営への側面的支援を継続しています。

また、2016年以降、好善社はタイの隣国ラオスとのかかわりを求め、ラオスのハンセン病回復者村を5回訪問、ラオスとの交流を重ね、今期から二つのコロニーの教育施設の支援事業を始めます。

公益社団法人　好 善 社　　2023年5月25日
代表理事/三吉信彦
理事/棟居　勇　川﨑正明　阿部春代　乗　圭子　藤原真実
岡田祐之　渡辺圭一郎　　監事／加藤裕司

〒153-0065　東京都目黒区中町１丁目７－４　電話 03－3712－3845　FAX:03－3791－1150　振替口座 00160－7－70163
Email:kozensha@kt.rim.or.jp　ホームページ・URL：https://kozensha.org/